

グローバル・コミュニケーション研究所2012年度活動報告

雑誌名	異文化コミュニケーション研究
巻	25
ページ	21-38
発行年	2013-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1092/00000778/

グローバル・コミュニケーション研究所

2012年度活動報告

(1) 研究プロジェクト紹介

●多言語使用者の言語使用と評価に関する社会言語学的研究

代表：サウクエン・ファン（本学国際コミュニケーション学科教授）

研究協力者：菊地浩平（国立情報学研究所特任研究員）

高 民定（千葉大学文学部准教授）

今 千春（本学留学生別科非常勤講師）

村岡英裕（千葉大学文学部教授）

〈研究概要〉

社会の国際化、外国人の増加、インターネットの普及に伴い、日本でも言語環境は多様化し、日本語以外の言語使用場面も増えている。一方で、日本に住む外国人の中には日本語だけでなく、多言語を使用せざるをえない人々（多言語使用者と呼ぶ）がおり、言語環境の多様化にともなって、彼らの言語使用や評価に関する意識も変わってきているように思われる。また一般の外国人居住者であっても、生活の中で日本語以外の言語（英語など）を使用する機会は少なくない。彼らが直面する言語使用の問題は、多言語環境に暮らす人々の言語習得や評価として捉えなおすことができるであろう。とくに多言語使用者自身がそうした言語問題をどのように評価し、解決しようとしているかを調査研究することは、多言語使用者の言語管理や言語習得の新たな局面を照らすことにつながると考える。本研究では、社会言語学観点から多言語使用者の言語習慣（多言語使用パターン）に注目し、日本語使用を含む彼らの言語使用や、その言語使用をめぐる評価を調べることにより、多言語使用者の言語管理と言語習得の新たな枠組

みを構想・作成することを目的とする。

研究期間中、次のテーマに基づいて計4回の言語管理研究会を行った。研究会テーマ：近年日本の多文化共生の課題とともに外国人の言語運用能力に対する母語話者の「評価」が再び注目されている。一方、言語管理研究においては、「評価」は管理プロセスの一つの段階として、参加者による言語問題の認識とその問題処理のための手掛かりとして取りあげられている。本年度は接触場面における参加者のインターアクションに対する「評価」に注目し、特に「当事者」と「プロセス」の視点から評価を再考察することで、接触場面研究における評価研究の今後の展開を考えていく。

●短期留学生の生活場面における学び——寮生活を中心に——

代表：吉田千春(本学留学生別科講師)

研究協力者：中川康弘(国際交流基金日本語教育派遣専門家)

〈研究概要〉

留学期間の短い短期留学生にとっては教室内外を問わず、日本の生活の全てが学びの場になり得る。特に、住環境は生活の基盤であると共に、教室外の学習を支える場としても重要な意味を持つと考えられる。そこで、本研究では留学生が主に住んでいる「留学生寮」と、日本人学生と留学生が一緒に住んでいる「混合寮」の2つの寮を調査対象とし、それぞれの寮における学びの実態調査を行うことを目的とする。

本年度は「留学生寮」に住む留学生5名を対象に、縦断的なインタビュー調査を行った。今後は、「混合寮」の留学生について調査を行い、どのような環境が留学生の学びを促進させるのかという点についても研究を進める必要がある。

●外語大における多文化交流——留学生と一般学生の交流の実態と意識の変容——

代表：上原由美子（本学留学生別科講師）

研究協力者：尾沼玄也（本学留学生別科講師）

進 大璽（IES 全米大学連盟東京留学生センター副所長）

徳永あかね（本学留学生別科准教授）

〈研究概要〉

本研究は、神田外語大学における留学生と一般学生の交流の実態、および交流を通じた双方の意識・行動の変容を明らかにすることである。留学生にとって一般学生との交流や彼らから受ける支援が重要であることは言うまでもないが、一般学生にとっても留学生と共に過ごすことで得られる広い視野や多様な価値観は、グローバルな人間に成長するための貴重な糧となる。留学生別科では、学内外の各部署と連携し、「KUIS 多文化交流ネット」をはじめ様々な留学生支援システムを構築し、留学生と一般学生の多文化交流を促進してきたが、現在この支援システムの開始から 10 年余りが経ち、その利用状況や貢献のあり方を検証する時期が来ている。また、学生自身による自主的な相互交流の実態と支援システムの整合性も検証する必要がある。これらの課題を踏まえ、本研究では、その成果として、留学生と一般学生が互いに接触しやすく交流の質を高められる環境を整備し、両者が多文化共生の場である外語大で共により有意義な大学生活を送ることへの貢献を目指す。

今年度は、質的研究として、留学生、留学生と交流のある一般学生、留学経験のある一般学生、日本での留学を終えた元留学生などに対しインタビューを行った。既に終えたインタビューからは、学生間の交流の実態や問題点に加え、一般学生の留学への動機付けや「留学への入り口探し」に関する問題なども浮かび上がってきた。今後は、インタビュー調査の継続に加え、縦断的インタビュー調査、および量的研究として「KUIS 多文化交流ネット」に登録している一般学生にオンラインアンケートなどを行い、交流促進のための環境整備に生かすことが課題である。

●戦後日本政治と外交（継続）

代表: 和田 純(本学グローバル・コミュニケーション研究所特別顧問・
国際コミュニケーション学科教授)

〈研究概要〉

佐藤政権の首席秘書官を務め、最長政権を支えた楠田實が残した資料をもとに、総理官邸が果たした中枢機能に関わる共同研究を行った。資料の分類・整理を継続すると共に、分析視角の検討と資料の読み込みを行い、より中長期の研究プロジェクト立ち上げに向けて準備を行った。成果の一部は、NHK スペシャル取材班編『沖縄返還の代償: 核と基地——密使若泉敬の苦悩』(光文社、2012年)、中島琢磨『沖縄返還と日米安保体制』(有斐閣、2012年)に反映された。

●グローバル社会で働く

代表: 豊田 聡(本学国際コミュニケーション学科講師)

〈研究概要〉

グローバル時代のキャリアを考え、挑むうえで、多くの文献にあたるのと同時に、見た・聞いた・働いたという一次情報は独特の説得力を提供する。海外及び国内企業でのインターン実習を果たした本学学生が企業人と報告の場を共有し、シンポジウム参加者とともにその特色や意義を考察する。

本年度11月に成果発表を兼ねた本研究所主催のシンポジウムを開催した。(後述の(3)を参照のこと)

(2) 学内講演会報告

●第1回(6月4日)〈シンポジウム〉「東日本大震災から1年——報道と支援活動をふり返る」

パネリスト: リンダ・オーハマ(日系カナダ人映画監督)

ウィスパリング通訳: 小野尾光平(本学英米語学科4年)

「TOHOKU-CANADA Connections」

パネリスト：水野孝昭（本学アジア言語学科教授）

「つながること——311 後のメディア」

パネリスト：山本みき（本学英米語学科 3 年）

「宮城県東松島市教育支援ボランティア」

コメンテーター：小菅伸彦（本学アジア言語学科教授）

今年度、本学に発足した「グローバル・コミュニケーション研究所」の第1回目のイベントとして、『東日本大震災から1年——報道と支援活動を振り返る』と題するシンポジウムが開催された。

最初に、本学の3年生、山本みきさんが、昨年の夏、東松島の小学校において行なった教育支援ボランティア活動についてスライドを見せながら、子供たちとの触れ合いについて語った。そのなかで、原発事故や復興の問題でもめる大人たちの影で子供たちが傷ついている、という指摘にはハッとさせられるものがあった。

リンダ・オーハマ氏は、東日本大震災直後のカナダ人の反応、氏の呼びかけで行われたカナダ人による義援活動、そして、来日し、直ぐに向かった東北の被災地における人々との触れ合いなどについて編集したスライドを見せ、自身の具体的な体験について語った。

また、昨年11月、本学における講演で話したJapan-Canada Kids for Kids Quilt Project（「がんばれ東北！カナダと日本、キッズ・メッセージ・キルト・プロジェクト」）が、その後、飛躍的に展開したことが報告された。「被災者たちは、家族や家を失ったにもかかわらず、心からの笑顔 genuine smile を見せてくれた。前向きに生きようとするその姿に教えられることが多い」と語ったのが印象的であった。

最後は、平成24年3月まで朝日新聞に勤務していた水野孝昭氏が、被災地での取材体験から、現場の被災者が最初に求めていたのは家族の安否や救援物資の到着など地域ごとの具体的な情報であり、「東京発」のマスコミ情報ではなかった、その落差を埋めたのが手書きの「尋ね人」ピラヤ地元紙の壁新聞だった、と当時の様子を生々しく伝えてくれた。

また、原発事故の直後、政府と東電による情報提供が後手に回り、当局発表の「客観報道」に終始した既成の大手メディアも大きく信頼を失ったと指摘。その補完役として、「ツイッターなどの新しい伝達・拡散メディアが一躍脚光を浴びた。ただ、その内容は玉石混交なので、受け手の側がよく吟味する必要がある」と話した。

パネリストたちによる報告の後、コメンテーターの小菅氏から洞察に満ちたコメントがあり、会場からも多くの質問と活発な意見が出された。昨年、被災地でボランティア活動に参加した学生たちからは自分たちの体験に基づいた質問がなされ、パネリストたちとの活発なやりとりが見られた。

●第2回(6月14日)〈シリーズ:留学生と語ろう〉第1回「留学について語ろう! 留学経験から私が出たもの」

司会: 上原由美子(本学留学生別科講師)

本学留学生別科「日本語インターアクション5」クラス学生 10名

松本智明(本学国際言語文化学科4年)

川崎裕季菜(本学国際言語文化学科4年)

後藤隆恭(本学国際コミュニケーション学科3年)

陣山夏子(本学国際コミュニケーション学科4年)

衣笠円香(本学国際コミュニケーション学科4年)

キャンパス・レクチャー・シリーズ第2回にあたる今回は、「留学について語ろう! 留学経験から私が出たもの」というテーマで、本学留学生別科「日本語インターアクション5」クラスの留学生10名と留学経験をもつ日本人学生5名をパネリストとして迎え、上原由美子氏(本学留学生別科日本語インターアクション5担当教員)の司会により活発な議論が行われた。

このシリーズは、留学生と留学経験のある日本人学部学生が留学についてさまざまな角度から本音で語ろうとするもので、今回は「留学経験」を通じた気づきや自己の変化や成長、またこうした経験が将来にどう活かさ

れて行くのかといったことが中心テーマとして取り上げられた。

まず、参加者それぞれの自己紹介の後、留学をして感じたこと、カルチャーショックなどについて、留学生、日本人学生それぞれが体験談を語り合った。ここでは、挨拶の仕方などのコミュニケーション・ルールや使用する交通手段や服装といった生活のスタイル、また物価など社会の状況の違いについてさまざまな体験談や疑問点があげられた。さらに、学生の生活や入学試験についてなど、教育システムの違いという学生ならではの話題でも盛り上がった。

次に、話題は留学と将来について、とくに日本の就職活動と留学についてそれぞれの視点から意見が交わされた。日本では、留学をした場合、その期間が就職活動期間と重なることが多く、就職の不利になるために留学を断念する学生もいるという。しかし、留学経験のある日本人学生からは、留学が自身のアピールになること、バイリンガル向けの求人もあることが指摘され、決して不利なものではないとされた。一方、留学生にとって留学とは自分の強みになるものであり、多少就職が遅れたとしても問題ないと考えられている。

最後に、留学を経験して変化したことについては、日本人学生・留学生ともに自身の国や家族に目を向けるようになったことを挙げていた。海外に出て異文化と向き合うことが自身の国や家族、自分自身を見詰め直すきっかけにもなり、自己の成長へとつながっていくのであろう。

(今千春・留学生別科非常勤講師)

●第3回(6月22日)「英語落語の世界——Let's try English Rakugo!」

須藤達也(本学英米語学科非常勤講師)

本学の講師である須藤達也氏は、英語翻訳・通訳者、英語教育の専門家であり、また鹿鳴家英楽という落語家として活躍している。須藤氏は1983年に桂枝雀の英語落語を見たことをきっかけに英語落語の世界に入り、2007年からは英語落語教室を開いている。本講演はまず須藤氏から英語落語の歴史や特徴を教わり、その後実際に英語落語を演じてもらうという形

で進められた。

まず、第1部では落語、また英語落語について、須藤氏が強い影響を受けた立川談志、桂枝雀、そして快樂亭ブラック3人のキーパーソンに焦点を当てて解説がおこなわれた。立川談志は1983年に落語協会を脱退し、立川流を設立している。須藤氏も1984年にこの立川流に参加し、学んだという。立川談志は『現代落語論』という落語論の書を落語家として初めて出版しており、そこでは落語と講談を区別し、講談が偉人などを扱うのに対し、落語は庶民を題材とし、一般人の人生を取り上げていることを論じていることが紹介された。一方、桂枝雀は英語落語の父とされる落語家で、分析的に落語を類型化し、笑いの「緊張と緩和」を考察した人物である。桂枝雀の著書『落語で英会話』は、英語落語がどのように訳され、演じられたかを書いたものだが、そのプロセスを文化の違いという視点から見ていくことは非常に興味深いという。最後に、快樂亭ブラックは、明治時代のイギリス人落語家で、創作も行っていた人物である。彼は、英語落語家ではないが、英国のおとぎ話などを背景として創作を行っていたことから、文化の違いを超えて落語を表現しようとするところが英語落語にも通じているという。

また、講演では、落語と英語学習との関係についても語られた。落語の特性から、英語落語はプレゼンテーション・スキルの向上、また自国文化や自国語を知り、英語で紹介したりする機会を得ること、さらに英語学習の動機付けとなることが指摘された。これらは英語を学習している本学学生には大変参考になったと思われる。

第1部の最後にはフロアの参加者の何名かが短い英語落語に挑戦し盛り上がった。

講演第2部では、高座にて須藤氏による英語落語が演じられた。快樂亭ブラックの「ビールの賭け飲み」など面白い噺が演じられ、会場はどっと笑いが起きていた。

第1部、第2部を通し、英語落語の世界に引き込まれ、その魅力をたっぷり味わうことのできた講演会であった。

(今千春・留学生別科非常勤講師)

●〈グローバル・コミュニケーション研究所発足記念講演〉

第4回(7月10日)「ミャンマー民主化のゆくえ——アウンサンスーチーとノーベル平和賞」

永井 浩(本学国際言語文化学科元教授)

コメンテーター: エイチャン(本学アジア言語学科教授)

本講演では、最近注目されているミャンマー(ビルマ)の民主化について、民主化運動の指導者アウンサンスーチー氏のメッセージから、その背景となったミャンマー(ビルマ)の社会的状況と文化的価値観を理解し、私たちがどのような役割を担うべきか問いかけられた。

講演会はまず永井氏の講演、次にエイチャン氏のコメントがあり、最後にフロアを交えた質疑応答の時間が設けられた。

永井氏の講演では、まずミャンマー(ビルマ)という国において民主化問題が浮かび上がった背景が説明された。そして、そこで指導者となったアウンサンスーチー氏がどのような価値観・思想をもって民主化を唱えたのかを実際の彼女の言葉をもとに紐解いていった。つまり、彼女が掲げる「民主化」とは、ミャンマー(ビルマ)の国教である仏教の真理に基づいており、「慈悲」と「誠実」という仏教の基本的な教えを実践することが民主主義・人権回復の実現となるとしたのである。最後に、今回のようなある国のローカルな価値観に基づいた民主化運動が世界的なメッセージにつながった事実を指摘し、日本が今後ミャンマー(ビルマ)の経済発展、自由の発展のためにいかに援助をしていくべきかを考える必要があるとした。そしてそのために、私たち個人個人がミャンマー(ビルマ)の民主化に関心を持ち、どのような役割を果たせるかを考えていくべきであると問いかけ、講演を締めくくった。

続いてエイチャン氏からは、アウンサンスーチー氏との交友や彼女の人物柄について語られた。エイチャン氏とアウンサンスーチー氏とは京都大学の留学生として出会い、級友として親交を深めていったという。当時アウンサンスーチー氏はイギリスの大学に在学中で、資料収集のため東南アジア研究センターの研究者として来日していた。エイチャン氏によって語ら

れるアウンサンスーチー氏は、現在のアウンサンスーチー氏とは違った印象で、彼女の本来の人間性、そして指導者として変化していった様子が読み取れた。

最後に、質疑応答ではフロアから多くの質問が寄せられ、活発な議論が交わされた。そこでは、今後のミャンマー(ビルマ)の民主化について予想される課題はあるものの、民主化へ向けて社会が変化している点を評価し、今後を注視していくことが重要なのではないかという結論が永井氏によって改めてまとめられた。(今千春・留学生別科非常勤講師)

●第5回(10月11日)「カナダのフランス語圏:ケベック州の社会と文化」
ドゥニーズ・ダウ(ケベック大学モントリオール校名誉教授)

本講演会は、授業「カナダ研究入門Ⅱ」の枠内で行われた。講師は、2012年10月6日に開催された日本ケベック学会全国大会(<http://ajeq.blog26.fc2.com/blog-entry-81.html>)の基調講演者としてカナダ・ケベック州政府によって招聘され、その後、明治大学と立教大学においても講演された。

学会と他大学では、専門のケベック州の言語政策についての講演をフランス語で行ったが、本学では北米唯一のフランス語圏として知られるケベック州の社会と文化について、全体的に英語で解説する講演であり、ケベック州の地理と言語別人口構成、政治、言語政策、気候、四季とお祭り、文化産業、シルク・ドゥ・ソレイユ、歴史とケベック市・モントリオール市の旧市街の佇まいなど盛りだくさんの内容となった。

今年、制定35周年を迎えた「フランス語憲章」と呼ばれるケベック州内のフランス語を保護する言語法については、専門の立場から重点的に解説された。同憲章制定前は、多数派であるフランス語系住民の言語であるフランス語よりも少数派の英語の方が社会的・経済的な優勢言語であった。しかし、同憲章の制定により、現在では、移民の子供たちは、義務教育ではフランス語を教育言語とする学校への通学が義務付けられ、商業用看板はフランス語で表示されることが義務付けられている(ただし、フランス語よりも文字が小さければ、他言語併記も可)。また、中規模以上の民間企

業は業務のフランス語化を義務付けられている。こうした言語状況に関する解説とともに、9月に行われたケベック州総選挙で、ケベック州のカナダからの分離を目的とするケベック党が政権に返り咲いた最新の政治的局面についてもわかりやすく話された。

授業の正規受講者に加え、近隣の方々も混じり、多くが聴き入った。英語による講演であったが、パワーポイントは日本語で用意され、ケベック州の四季がよくわかる美しい写真を数多く見せたことで、視覚的にも楽しい講演となった。

●第6回(11月7日)「韓国10年と、これから」

金 泳徳(韓国コンテンツ振興院日本事務所所長)

司会: 本田恵子(本学アジア言語学科非常勤講師)

ドラマ「冬のソナタ」が大ヒットした2003年から10年、現在まで多くの韓国ドラマやK-POPコンテンツが輸入され、身近なものになっている。この10年間で韓流はどのように変化し、現在どのような状況にあるのか、また韓流の今後はどのような方向へ進んでいくのか。本講演ではこうした問いに対し、さまざまなデータから考察がなされた。

講師の金泳徳氏は、上智大学大学院博士課程修了後、韓国放送映像産業振興院研究員を経て、現在は韓国コンテンツ振興院日本事務所所長として韓流産業に携わっている。講演は、第1部「韓流ドラマ・K-POP・韓国映画の今」と第2部「韓流の今後」という2部構成で進められた。

第1部では、タイトル通り現在の韓流について、日本市場の特徴、韓流ドラマ、K-POP、韓国映画等それぞれの分野の現状が示された。日本市場は韓国コンテンツにとって最大・最適市場であり、経済的効果だけでなく韓国文化の普及やイメージアップも図られている。この10年で韓国ドラマやK-POPコンテンツは量的に拡大し、その流通手段も多様化した。また進出形態も韓国資本へと変化し、消費者層も広がっている。さらに、コンテンツを通じた派生ビジネスも広がっており、これらの収益は輸出統計資料をはるかに上回ると予想される。一方、韓国映画や韓国書籍はあまり

定着していないという。

第2部ではこうした現状を受け、今後の韓流の展望が語られた。韓流にとって日本は魅力あるマーケットであり、確実な消費者が存在するため、今後もビジネスは定着する見通しである。さらに、韓国と日本の文化のハイブリッド化が進み、今後は日韓の合弁会社や共同プロジェクト等が韓流の主流になっていくことも十分考えられる。こうして韓国と日本がビジネスパートナーとしての連帯が強まり、今度は日本のコンテンツを韓国で販売する可能性もあるという。

質疑応答では、韓国における日本コンテンツの受け入れについて質問があがった。韓国では日本ドラマ等は定着していないが、漫画やアニメ等の人気は高く、現状では韓国のほうが日本コンテンツを受け入れている可能性が高いという。

最後に、司会の本田恵子氏は、日本において韓国ドラマやK-POPの人気は高いが、韓国文学や芸術的ものはまだ浸透していないことを指摘し、今後はこうした韓国の文化的なものや民族的なものに目を向け、深く理解していくべきだと強調した。(今千春・留学生別科非常勤講師)

●第7回(11月12日)「在日ブラジル人の素顔——雇用危機と東日本大震災を乗り越えて」 本学イベロアメリカ言語学科共催

アンジェロ・イシ(武蔵大学社会学部教授)

司会: 高木 耕(本学イベロアメリカ言語学科准教授)

日本在住のブラジル人は外国人全体の第3位と多数を占めており、身近な存在である。日本人ブラジル移民から100年、日本の日系ブラジル人受け入れから20年余り経つが、かれらの現実日本のマスメディアでは満足に伝えられていない。本レクチャーでは、こうした在日ブラジル人の「素顔」と「本音」に迫り、外国人と日本人とがどのようにつき合っていくべきかを考えることを目指した。

講師のアンジェロ・イシ氏は1990年に留学生として来日し、今日まで日本で暮らしている。彼は「日系ブラジル人3世」にあたるが、アイデン

ティティは「在日ブラジル人 1 世」であるという。これには自身が「日本社会の一員である」というメッセージが込められている。

講演は日系ブラジル人とかれらを取り巻く移民政策の歴史から始まった。以前は「デカセギ」が目的であった在日ブラジル人も最近では日本で投資を行うことが多く、日本での生活を基盤としたスタイルに変化しているという。それに伴い、エスニック・ビジネスも広がり、さまざまな文化が融合している。こうした在日ブラジル人の文化に対する豊かな発想はこれまで話題になることが少なく、一般的には伝えられていないことが強調された。

また、在日ブラジル人の本音は「音楽×日本語能力×アイデンティティ」を通して表現されるという。かれらの作った歌が実際に紹介されたが、これらの歌からは「ブラジルも恋しいが、日本で前向きな生き方をしたい」という心境が伝えられる。

近年の在日ブラジル人の状況を大きく変えたのは、リーマンショックと東日本大震災である。リーマンショックではブラジル人労働者がいち早く職を失い、多くの人が日本を去った。一方、東日本大震災時に日本を脱出したブラジル人は少なく、むしろブラジル大使館と連動していち早く被災地支援を行っていたという。被災地域に住むブラジル人が少ないにもかかわらず、支援を行っていた背景には、自身が日本社会の一員であるという意識があると指摘された。

最後に、危険な原発作業のためのブラジル人の求人広告が出ているという問題が取り上げられた。現在このような広告が実際に掲載されるシステムに問題があり、危険な作業を外国人労働者に強いることに疑問を持たなくなることへつながる。こうした状況に危機感を持ち、負の連鎖を断ち切るべきだということが強く主張された。

質疑応答では、教育者の立場からできる活動について、また日系ブラジル人と非日系ブラジル人とのギャップについてなど重要な問題が取り上げられ、議論が行われた。

(今千春・留学生別科非常勤講師)

● 第 8 回 (12 月 5 日) 「神々と幸福の南アジア：ブータンとネパール」

ソナム・トブギャル(アジア経済研究所研修生)

バル・クリシュナ・アディカリ(アジア経済研究所研修生)

司会・解説: 山形辰史(アジア経済研究所開発スクール事務局長・
教授)

同時通訳: 小野尾光平(本学英米語学科4年)

岩井良晃(本学英米語学科3年)

椿花緒里(本学英米語学科2年)

奥原来未(本学英米語学科2年)

本レクチャーは、アジア経済研究所より司会および講師を迎え、本学の学生にはなじみが薄い南アジアの国についてお話いただいた。南アジアは地理的にも民族的にも多様性に富んでおり、今回はその多様性の象徴でもあるブータンとネパールに注目し、国の基本的な知識、国民の生活、そしてかれらがもつ哲学や宗教を通してそれぞれの国の理解を深めるというテーマであった。

まず、ブータンについてトブギャル氏の講演があった。講演は前半でブータンの基本的な情報、後半でブータンが発展指標として採用している国民総幸福量(GNH)のコンセプトが紹介された。基本的な情報では、地理的特徴、人口、政治行政、民族衣装、宗教、国花、国獣、また国のスポーツについて写真とともに説明された。次に、GNHの成り立ちとその理念、指標が示され、国の政策としての実践、ブータン国民のGNHの実態などが説明された。GNHとは、物理的な幸福と物理的ではない幸福の間にバランスを作り出すためのアプローチである。GNHは1972年に前国王によって提唱、2007年にGNH委員会が設立され、指標の作成、実態調査、政策の評価などを行っている。GNHは9領域、26項目が指標とされ、あらゆる政策はこのGNHのレンズを通して評価、選別される。結論として、GNH指標が発展の物差しや進むべき方向のコンパスとなり、資源分配方法や優先すべき政策が選定され、分配資源や政策が個人や地域、そして社会全体に影響を与え、それがまたGNH指標に反映されていくという循環ができあがる必要があるという。

次に、ネパールについてアディカリ氏の講演があった。まず、ネパールの地理的特徴から始まり、国の基本情報が述べられた。次に、ヒンドゥー教の聖地であるパシュパティナート寺院、仏陀の生誕地であるルンビニ、モンキー・テンプルとして知られるスワヤンブナート仏塔、ネパール最大の仏塔であるボダナートといったカトマンズを中心に位置する主な寺院が紹介された。加えて、ユネスコの世界遺産に指定されている古都バクタプールやパタンのダルバール広場や数々の仏教芸術が紹介された。さらに、ネパールの人々について、多民族、多宗教であること、とくに生きた女神とされるクマリという少女がいることが取り上げられた。最後に、ネパールの自然、観光地、アクティビティなどが詳しく説明されたビデオを視聴した。

質疑応答では、文化の多様性と普遍性、また大国に囲まれた国としての状況など様々な話題で活発な議論が行われた。

(今千春・留学生別科非常勤講師)

●第9回(12月11日)〈シリーズ:留学生と語ろう〉第2回「大学ってなに? 大学生は何をする? 世界の大学生生活を知ろう!」

司会: 上原由美子(本学留学生別科講師)

本学留学生別科「日本語インターアクション5」クラス学生 10名
土屋夏実(本学英米語学科3年)

松田和人(本学国際コミュニケーション学科4年)

菊地しのぶ(本学国際コミュニケーション学科3年)

多昌恵美(本学国際コミュニケーション学科4年)

キャンパス・レクチャー・シリーズ第9回にあたる今回は、「世界の大学生生活を知ろう!」というテーマで、本学留学生別科「日本語インターアクション5」クラスの留学生10名と留学経験をもつ日本人学生4名をパネリストとして迎え、上原由美子氏(本学留学生別科日本語インターアクション5担当教員)の司会により活発な議論が行われた。

今回は、世界の大学生生活を知ることで自身の大学生生活を見つめ直し、有

意義な大学生生活とは何かを考えることが中心テーマに据えられた。

まず、参加者の自己紹介の後、高校時代の過ごし方と大学受験について各国の事情が紹介された。高校時代の生活は、その国の受験のシステムに左右されており、国によっては高校1年生から受験勉強中心の生活を送るという。

次に、大学生活についてさまざまな意見が交わされた。まず、大学での人間関係について、留学生から日本の大学生の上下関係に対する疑問が投げかけられた。他にも上下関係のある国はあるが、親しさが優先されるため、日本の先輩後輩のような距離感はないという。日常生活については、日本人学生は日常的にアルバイトをしているが、他の国では宿題が多く勉強が忙しいため、そうした生活は不可能だという。また、大学の授業において、宿題、テスト、ディスカッションへの参加などのうち、どれが重視されるかはその国の教育事情によって異なっており、留学生はその違いに驚かされることが多い。さらに、専攻と英語学習については、どの国も今は2つ以上の専攻を持つこともあり、外国語も英語プラス他の外国語の能力が求められている。こうした能力は就職活動にもつながっており、留学経験も強みになるという。その一方で、日本では就職活動のために留学を諦める学生も多く、実際、時期を逃すとエントリーできない企業もあるため、いまだ難しい現実も指摘された。

最後に、フロアとのディスカッションでは、地域社会との接触が話題になったが、日本に留学している学生の多くは地域社会とも積極的に関わっており、留学中に日本でしかできないことを1つでも多く経験し、自分の成長や将来に活かしたいという意欲が改めて示された。こうした毎日を自分で充実させようとする姿勢は、有意義な大学生生活を考える大きなヒントになったであろう。(今千春・留学生別科非常勤講師)

(3) その他のシンポジウムなど

- シンポジウム 〈シリーズ：グローバル社会で働く〉第1回「実習からみえるビジネス世界とキャリア形成」本学キャリア教育センター共催

(11 月 29 日、於：神田外語大学クリスタルホール)

第 1 部 講演

「学生インターンシップ受け入れについて——職場への効果と想い」
瀬瀬芳彰(富士通株式会社ビジネス推進本部文教ソリューション
推進部長)

第 2 部 報告

「インターンシップ科目履修者と企業協力の推移」
上田敏昭(本学キャリア教育センター)

「必修科目設定と履修効果」
豊田 聡(本学国際コミュニケーション学科講師)

第 3 部 インターンシップ実習者報告

佐藤真子(本学国際コミュニケーション学科 3 年)
荒井久美(本学国際コミュニケーション学科 3 年)
諏佐ひとみ(本学国際コミュニケーション学科 3 年)
安 慧(本学国際コミュニケーション学科 3 年)
吉田真由子(本学国際言語文化学科 3 年)
宮本竜弥(本学国際コミュニケーション学科 2 年)
吉野真代(本学国際コミュニケーション学科 2 年)
野島聖矢(本学国際コミュニケーション学科 3 年)
中村有沙(本学国際コミュニケーション学科 3 年)
カンマリム(本学国際コミュニケーション学科 3 年)

このシンポジウムの目的は、大学生によるキャリア形成の一手法である
企業内インターンシップの特色と効果を、事例とデータをもとに当事者間
で報告を行い考察することにあつた。大学教育におけるインターンシッ
プへの関心の全国的な高まりを実施の背景とした。

第1部では実習受け入れ実績を背景に企業側のねらい、創造性に満ちた実態および期待する実習生像が紹介された。また、第2部ではデータに基づくアレンジ実績と、教育効果への見解が報告された。第3部においては、多様な地域・多様な業種での実習を果たした学生登壇者が、自身の成果と成長を中心に日本語または英語で報告を行い、続いて相互の実習・環境・成果を比較した共通点・相違点のディスカッションを行った。

大学生・企業ともにインターンシップに対する関心が高まるなか、その意義、効果および展望について産学が集い、実地に基づく報告とディスカッションを行う場となった。